
手のひらの上

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手のひらの上

【著者名】

「ひつじ」

N6202D

【あらすじ】

勇んで家出をした少年の、くすっと笑える結末。ショーンくん、それでホントにいいの？ 某所で提出した掌編です

「ママなんか、大つきひこだ！」

大きな声でそう言いつと、シウンは大好きなリュックを棚からひつたくつた。だいじなアイテムをいっぱい詰める。ゲーム、お菓子、小さい人形その他のいろいろ……。

それからばたんと大きな音を立てて、ドアを勢いよく閉めた。

門を出て、四つ角を曲がって、いつもの空き地も過ぎて。途中で後ろを振り返つてみたけど、ママは来ない。

(ほひ、せつぱつー)

ボクのことなんか要らないんだひつと、シウンは思つた。どんどんどんどん歩いていく。

ちょっと遊んでたくらいで怒られる家なんて、ないほうがいい。お腹がすいたら、お菓子を食べればいい。とってもいっぱい持つてきた。

どこか秘密基地をつくり、そこで寝ればいい。きっと家より気持ちいいはず。それに宿題とか片付けどか、いろんなこと言われないですね。

そうやって考えながらずつとずつと歩いて、気がつくと知らない公園の前にいた。

「つわあ……」

思わず声をあげる。

ぐるぐる回る大きなすべり台は、降りると「うがー」一つもある。

丸太を組んで作った高くそびえる台からせ、ターザンみたいに口一^トにぶら下がって、降りていけるヤツまである。

他にも大きな砂場、迷路、ブランコ、名前を知らない面白そうなもの……。

「ねえ、ボクにもやらせて!」

「いいよー。じゅんばんね」

遊んでいた子たちに声をかけて、入れでもらって、いっしょになつて走り回つた。

かけっこ、鬼ごっこ、登つたり降りたり転がつたり、息が切れてもまだ遊ぶ。

「おまえ、名前は? どつから来たんだ?」

「シユンだよ。ボク、家出してきたんだ!」

「すげえ! 家出とかカッコいいじゃん」

みんなが目を丸くして自分を見つめて、シユンはちょっと得意になる。

家出したボクが、いちばんすごい! と。

でもそのうち……みんなが騒ぎはじめた。

「ヤバいよ、雲、真っ黒だもん」

「なんか、カミナリなつてる? あたし帰るね」

遊んでいる友だちが減つていぐ。

だんだん公園がさみしくなる。

ぽつんと冷たいものが、シユンの顔に落ちた。

「ふつてきたーっ！」

わっと誰もが走り出す。

「ひやー、ぬれるぬれる」

「またねっ！」

たちまち公園から、子どもたちの姿が消えた。

(どひじょり……)

家出してきたショーンには、帰るところがない。そもそも、帰り道が分からない。

ともかく濡れないようになると、ショーンは丸太で組まれた遊具の中に逃げ込んだ。

雨がだんだんひびくなつてくる。
しかもカミナリが、すゞに音で近づいてくる。

(「、こわくないやーーー。）

強がつてみたそのとき、けたたましい音を立ててカミナリが落ちた。

「ひつ……」

文字どおり縮み上がる。

怖い怖い「ワワイ。やつぱり怖いものは怖い。お菓子もゲームも持つてきたけど、カミナリなんて考えなかつた。
半べそで、隠れ屋の隅につづくまる。

そのとおり、声がした。

「あー、いたいた
聞きたなれた声。

「あーもへ、おかげで濡れた濡れた
こひばん聞きたかった声。

「ママー。」

よつかねー、窓降りやつなの、てなながら、入ってきたママですがつづく。

「ママー カミナリ……ひゅー」

ちゅうひど雷がゴロゴロと鳴つて、思わずおかしな声が出る。

「まつがねー、窓降りやつなの、てながら、家出なんかするかひ
それは何か違つと一瞬思ったが、また鳴ったカミナリこ、考えは
吹き飛ばされた。

「ママー、じつひー……」
「そのひつひむじしき
「なじでむせひひのや
「やまなかつたり……?」
「そのとき考える」

「でもママー、どうして、分かったの?」
「こ・れ・み・た・の・?」
「あー、何かか違つ気がしたが、それよりも女房のまつがまさつた。
もしたひつひつこと軽く、おでこを弾かれた。

笑いながら、ママがケータイを出した。

「あんた、自分の持つて出たでしょ
「あ……」

そうだった、とシュンは思い出す。最初にだいじなものリュックに詰めたとき、確かにケータイも入れたのだ。
だってあれは、友だちはまだ持つてない、血腫のアイテムだったから。

「便利よねー、これ
「うん」

シュンの子供用ケータイは、親のケータイとリンクしてある。だから簡単な操作で、今どこにいるかがすぐ分かる。
なのに今日は、すっかりそのことを忘れていた。
ママが追いかけてこなかつたのは、最初からケータイを持つてるのに、気づいてたからだろう。

「ボクこんど、ケータイ持たないで家出しちゃうかな……」

「そしたら、さらわれたときどこにいるか、分からなけどっ」

それは困る。

今日みたいに迷子になつたときに、探しでもらえないのもさっぱり困る。

家出するならケータイはあつたほうがいい、そうシュンは思った。

「で、どうすんの? 家出続ける?」
「やめとく……」

今だりへんなに怖いのに、夜になつたとて騒ぐのもやめよう。

「じゃ、櫻やんだけ騒ねつか

「うそー。」

ショーンは元気よく答えた。

(後書き)

拙作を読んで下さって、ありがとうございました。本家はライトノベルですが、たまにこういうのも投稿すると思います。良かつたら、連載中のものも読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6202d/>

手のひらの上

2010年12月11日03時01分発行